



# FSERC News No. 68

編集・発行：京都大学フィールド科学教育研究センター  
 住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町  
 TEL：075-753-6420 FAX：075-753-6451  
 URL：https://fserc.kyoto-u.ac.jp

2026年2月

## 社会連携ノート

### 「里山里海つながるフェス @イオンモール草津」を開催

森林生態系部門 田中 拓弥

2025年11月9日に、滋賀県南部を中心とした高校、大学、企業、団体、行政機関等が集い、里山里海や森里川湖海のつながりをテーマに発信と交流を行うことを目的として、イオンモール草津のイベントスペースにおいて「里山里海つながるフェス」を公益財団法人イオン環境財団との共催で実施しました。このイベントの狙いは、来場者が森里川湖海でのワクワクする取組に出会い、出展者が多様な人々と交流することによって、これからの里山里海での共創につなげることです。

午前は、龍谷大学政策学部の谷垣岳人准教授（同大学里山学研究センター長、「龍谷の森」里山保全の会副代表）から同大学で里山を保全してきた経緯やそこの生き物について解説いただきました。その後の出展団体による活動紹介では、公益財団法人イオン環境財団、草津市環境政策課、パナソニックグループ草津工場「共存の森」、特定非営利活動法人まるよし、「龍谷の森」里山保全の会、森・川・田んぼプロジェクト（大阪産業大学学生サークル）、滋賀県立高島高等学校科学探究部、立命館守山高専学校、滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖保全再生課、森里海と文化研究会（京都大学学生サークル）、滋賀県立膳所高等学校生物班、当センターの代表者が登壇しました。吹き抜けの会場にある大きなモニターに里山の生き物や活動風景を示しながらプレゼンテーションが行われました。



イベントスペースでの発表

午後、それぞれのブースで出展者が展示物の解説や顕微鏡観察の補助など来場された方々に対応しました。併行して進められたワークショップでは、生きものの塗り絵や草花に親しむしおりづくり、間伐材でのクラフト体験、土の性質を調べる実験が、それぞれの企画団体により行われ、主に子どもたちが参加しました。

今回の会場は開放的な空間で来店者の目に留まりやすく、大勢の方が来場されました。来場者アンケートでの満足度は高く、中でもワークショップ、顕微鏡での観察、生き物の標本展示の解説等が好評でした。また、2箇所の会場への訪問を促すスタンプラリーでは、ゴールした方へオリジナルの生き物イラストマグネットを進呈しました。こちらにも子どもたちやご家族が多く参加されました。



来場者に対応する出展者

当センターは公益財団法人イオン環境財団と協定を結び、2022年4月から同財団の支援を受けながら、「新しい里山・里海 共創プロジェクト」を連携して実施しています。同プロジェクトでは、里山里海の活動についての発信やネットワークづくりのお手伝いも目標のひとつとしており、そのための試みとして、「里山里海つながるフェス」を、2023年（イオンモール京都桂川）と2024年（イオンモール高の原）に開催してきました。今回を含む3年間の試みで得た経験を分析整理し、里山里海の自然に関わっていく人がさらに増えるために、どのようなアプローチが効果的なのかを探っていきたいと思います。

## 京都情報大学院大学（KCGI）および 京都コンピュータ学院（KCG）と 連携協定を締結

京都大学フィールド研は、2025年10月30日に、学校法人情報大学 京都情報大学院大学（KCGI）および京都コンピュータ学院（KCG）と、IT分野ならびにフィールド科学の融合を目指した連携協定を締結しました。本協定は、フィールド研が提唱する学問領域「森里海連環学」に関し、相互に連携・協力して情報通信技術の応用の取り組みを進め、教育・研究・社会連携活動の発展に寄与することを目的としています。

協定締結式では、館野隆之輔センター長と長谷川巨KCGI・KCG総長が協定書に署名しました。館野センター長からは、フィールド調査や自動観測、調査地や標本の管理、データ解析など様々な研究の場面でITが必要になることが説明され、長谷川総長からは、KCGI・KCGの歴史を踏まえて、KCGIの歴代学長が全員京都大学出身であるなど、これまでの関係が紹介され、お互いのニーズと強みを活かして連携していきたいと挨拶がありました。

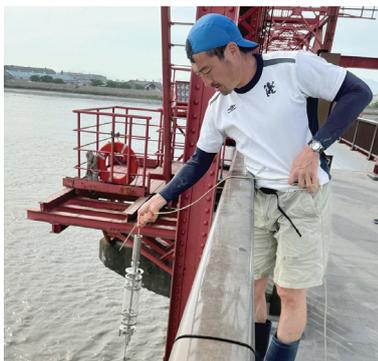
今後、双方の強みを活かして、市民の皆さんや自治体、IT関連企業など多様なステークホルダーと連携して、超学際的な研究を推進していきます。

## 教員紹介

里海生態保全学分野 准教授 鈴木 啓太

2013年4月に舞鶴水産実験所に助教として着任し、12年半の勤務を経て、2025年10月に准教授に昇任しました。これまでに増して強い自覚と責任をもち、教育研究のみならず組織運営にも貢献してゆきたいと思えます。

私の専門は沿岸・河口域生態学です。生物生産が活発であると同時に人間活動の影響を受けやすい水域を継続的に調査し、生物の生態的・生理的特性と水域の物理的・化学的特性を関連づけ、高い生産性を支えるメカニ



ズムを追究しています。学生時代は日本一の潮汐を誇る有明海、ポスドク時代は気候変動の脅威に曝される北極海をフィールドにしていました。現在は舞鶴水産実験所の目の前に広がる舞鶴湾や丹後海をフィールドに、教育研究船「緑洋丸」を活用し、日本海側気候の特性や気候変動の影響などに注目した研究を進めています。具体的には、スズキやヒラメの仔稚魚の生残と季節風や水温の関係、植物プランクトンの増殖と降水や気温の関係などを調べています。教育面では、京大生を対象とする実習ばかりでなく他大学生や高校生を対象とする実習も担当し、海の環境と生物に触れながら五感を通して学ぶ機会を提供してきました。研究指導においては、本人の興味や自主性を尊重し、日本人ばかりでなくケニア人、ベトナム人、インド人などの学生とともに多様な研究テーマに取り組んできました。今後もフィールド研の皆様と協力し、特色ある教育研究活動を展開してゆきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

Laboratory of Silviculture, Program-Specific Assistant Professor,  
森林育成学分野 特定助教 Cathleen Ludivine Petit

I have an academic background in ecology, with a dual specialization in biodiversity conservation and in modeling and statistics applied to ecological systems. In parallel, I completed a bachelor's degree in sociology, motivated by the perception that ecological training often overlooks the social dimension, despite human activities being the main drivers of the biodiversity crisis.

The central question guiding my research is how environmental problems can be addressed while explicitly accounting for



human factors. My work aims to bridge ecological processes with social and economic dimensions in order to produce more integrated and relevant insights for conservation and environmental management.

Methodologically, I combine statistical analysis, process-based modeling, and machine learning. My work ranges from modeling climate change impacts on biological systems using mechanistic approaches to integrating socio-economic indicators into ecological analyses to better understand human-environment interactions. I also started to apply machine learning techniques to large, complex datasets to address broad environmental and societal questions.

Through this interdisciplinary approach, I aim to contribute to more holistic strategies for understanding and addressing the biodiversity crisis.

My research focuses on forest ecosystem processes, particularly stream water chemistry and nitrogen (N) cycling, with an emphasis on nitrate ( $\text{NO}_3^-$ ) dynamics in forested watershed ecosystems. I am especially interested in understanding how environmental factors and human activities regulate nitrogen transport, retention, and vulnerability in forested watersheds. In my previous research, through extensive field-based stream water sampling, I examined spatial and regional variability in stream  $\text{NO}_3^-$  concentrations and ecosystem responses to atmospheric nitrogen inputs, climate variability, and forest management practices in Kyushu, Japan.

Methodologically, my research integrates field observations with geospatial analysis,



remote sensing, and advanced statistical and machine-learning approaches, including Random Forest regression. I assess the effects of atmospheric nitrogen deposition, climate variables, topography, and land-use disturbances such as clear-cutting on stream water quality. I also apply stable isotope techniques ( $\delta^{15}\text{N}$  and  $\delta^{18}\text{O}$ ) using the denitrifier method to identify nitrogen sources and transformation processes within forest ecosystems.

In addition to stream water chemistry studies, I have investigated the impacts of forest fires on rainwater chemistry in Palangka Raya City, Central Kalimantan Province, Indonesia, which further strengthened my interest in the links between biomass burning, atmospheric transport, and ecosystem nutrient inputs.

Alongside my research, I have teaching experience at Forestry from the University of Forestry and Environmental Science (UFES), where I taught courses in forest ecology, silviculture, environmental management, and remote sensing and GIS. Through interdisciplinary research that bridges field science, data-driven analysis, and environmental relevance, I aim to support sustainable forest and watershed management in both tropical and temperate regions.

## 受賞の記録

田中拓弥特任講師が、2025年度環境情報科学研究発表大会[事務局長賞]を受賞(2025年12月12日、日本大学会館)

田中拓弥・伊藤岳・八柳哲・横部智浩・包薩日娜・小井土凜々子・張曼青・杉山賢子・松岡俊将・赤石大輔・徳地直子・館野隆之輔・益田玲爾

「商業施設イベントスペースにおける大学発の環境活動の発信と交流の場づくりー「里山里海つながるフェス」を事例としてー」

環境活動を行う団体等の発信と交流の場づくりを目的として、京都府・滋賀県の商業施設において、「里山里海つながるフェス」を実施した。本研究では、参加者や来場者へのアンケートを分析し、その結果を報告した。同フェスでは、商業施設の利用客が地域の環境活動に気づく機会を提供していることがわかった。また、出展者の間での新たなつながり創りに寄与していることが確認された。

農学研究科応用生物科学専攻(M2)の竹野圭祐さんが、令和7年度日本水産学会近畿支部後期例会において、優秀発表賞を受賞(2025年12月14日、京都大学農学部総合館)

竹野圭祐・邊見由美

「ニホンスナモグリのオスに見られる大鉗脚の二型と個体間競争」

ニホンスナモグりは浅海域の砂底に巣穴を形成する十脚目甲殻類であり、スズキやクロダイなどの釣り餌としても知られている。本種の鉗脚は、左右で大きさが異なり、特に雄は、他個体への攻撃に利用しているとされるが、その詳細な生態は不明である。本研究では、大鉗脚の計測や競争行動の観察から、大鉗脚の機能を検証することを目的とした。雄の大鉗脚に二型が確認され、また、大鉗脚の二型が行動様式に反映されていると考えられた。

## 研究者の異動

10月16日 森林生態系部門に、Nay Lin Maung 研究員が着任。

11月16日 森林生態系部門に、Cathleen Ludivine Petit 特定助教が着任。

11月30日 森林生態系部門のNay Lin Maung 研究員が退職。

12月1日 森林生態系部門に、Nay Lin Maung 特定助教が着任。

## 活動の記録（2025年9～12月）

### シンポジウム等

きょうと☆いきものフェス！2025へブース出展（9月27～28日、京都府立植物園）  
 京都情報大学院大学および京都コンピュータ学院と連携協定を締結（10月30日）  
 里山里海つながるフェス@イオンモール草津（11月9日）

### 公開実習

自由課題研究（8月7～12日、瀬戸臨海実験所）  
 公開森林実習Ⅰ（9月3～5日、芦生研究林、上賀茂試験地、北白川試験地）  
 森里海連環学実習Ⅱ（9月14～20日、北海道研究林他）  
 公開森林実習Ⅲ（10月4,18日、11月8,29日、12月13日、上賀茂試験地）

### 全学共通科目

森里海連環学実習Ⅱ（9月14～20日、北海道研究林他）  
 博物館実習（館園実務）（11月2～6日、舞鶴水産実験所）  
 博物館実習（館園実務）（12月14～20日、瀬戸臨海実験所）  
 ILASセミナー

### 各施設における主な取組み

〈芦生研究林〉  
 芦生保全植物園の開園式典（10月21日）  
 芦生研究林一般公開2025（11月1日）\*  
 〈北海道研究林〉  
 自然観察会「秋の森の生態系」（10月4日、標茶区）\*

しべちゃアドベンチャースクール（10月18日、標茶区）  
 〈上賀茂試験地〉  
 里山おーぷんらぼ@上賀茂（9月13日、10月11日、11月15日、12月13日）  
 里山体験プログラム（イオン環境財団との共催、11月3日）  
 上賀茂試験地 秋の自然観察会（10月25日）\*  
 〈徳山試験地〉  
 周南市・京都大学フィールド研連携公開講座（10月18日、周南市役所および徳山試験地）\*  
 〈紀伊大島実験所〉  
 本州最南端部の環境を学ぼう（11月3日）\*  
 〈舞鶴水産実験所〉  
 日本海研究集会「教育研究機関の船舶情報交換会－身近な事例に学ぶ」（11月8日）  
 〈瀬戸臨海実験所・白浜水族館〉  
 白浜町水辺環境教室（8月20日）  
 公開ラボ・施設見学「白浜の海の自然と発見」（10月18日）\*  
 瀬戸海洋生物学セミナー（12月18日、オンライン）  
 白浜水族館冬休みイベント（12月23日～1月6日）  
 白浜水族館企画展「島島展 ～白浜の無人島で100年続けるモニタリング～」（12月23日～6月30日）  
 「白浜水族館からのお年玉」オリジナルカレンダー配布（12月30日～1月3日）

\*京大ウィークス2025参加イベント

## 予 定

12月23日（火）～6月30日（火）白浜水族館企画展「島島展～白浜の無人島で100年続けるモニタリング～」  
 2月14日（土）白浜の豊かな海と生き物について学ぼう！（京都大学白浜水族館）  
 3月15日（日）第21回附置研究所・センターシンポジウム 京

都からの発信－研究メトロポリスが描く未来－「知の交差点からみる自然 人間 社会」（京都大学百周年時計台記念館およびオンライン）  
 3月25日（水）第10回 森里海シンポジウム（京都大学北部総合教育研究棟およびオンライン）

2026年度の公開実習予定については、フィールド研ウェブサイトをご覧ください。https://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/opencourse

## フィールド散歩

—秋から冬にかけての各施設及びその周辺の様子をご紹介—



落ち葉のベッドに佇むオオサンショウウオ（水中写真）（芦生研究林）



エゾモモンガ（北海道研究林標茶区）



積雪を踏みしめモニタリング 1000 サイトへリター回収に向かう（和歌山研究林）



試験地のヒノキ材を用いて里山おーぷんらぼで製作したバターナイフ（上賀茂試験地）



新棟建設予定地の埋蔵文化財発掘調査の様子（北白川試験地）



11月から解禁となったズワイガニ（舞鶴水産実験所）

<https://fserc.kyoto-u.ac.jp/zp/nl/news68>

この他にも季節の写真をご覧ください。

◆FSERC Newsは、バックナンバーも含めてフィールド研のウェブページに掲載しています。

（編集後記）

寒さと雪の中、お疲れさまです。自然の美しさと厳しさを実感しつつ、春の訪れが待ち遠しい今日この頃です。

（NK）